

山崎朋子



ノンフィクション作家

やまざき・ともこ
1932(昭和7)～2018(平成30)
長崎県生まれ

父が海軍士官で幼少期を広島で過ごす。1940年、父を潜水艦の事故で亡くし、1945年6月に母、妹の3人で母の実家の福井県大野市に疎開。終戦後、福井大学学芸学部教育科に進学、卒業後は小学校の教員となる。1954年に上京。アルバイトをしていた喫茶店で、児童教育の研究をしていた上笙一郎と出会い結婚。女性問題や女性史の勉強を始め、自ら「アジア女性交流史研究会」を立ち上げて女性史の研究・執筆を続けた。1972年、貧しさのために海外へ行き娼婦とならなければならなかった女性「からゆきさん」について書いた『サンダカン八番娼館 底辺女性史序章』を刊行。この作品で第4回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。その他『サンダカンの墓』、『あめゆきさんの歌』、『アジア女性交流史』などを発表、歴史の中に埋もれた女性たちを掘り起こし、女性の在り方を探求し続けた。2018年、86歳で死去。

著作紹介

『サンダカンの墓』

(1974年、文藝春秋)

サンダカンにあるからゆきさんの墓をはじめ、マレー、ジャワなど東南アジア各地にからゆきさんの足跡を訪ねた、『サンダカン八番娼館』の続編ノンフィクション。

山崎朋子
サンダカンの墓



『サンダカンまで わたしの生きた道』

(2001年、朝日新聞社)

代表作となった『サンダカン八番娼館』を書くまでの半生を振り返ったエッセイ。戦中戦後の福井での生活や、上京して出会った朝鮮人男性との生活と苦悩、女性史研究へ進むきっかけなどを赤裸々に綴っている。



『アジア女性交流史』

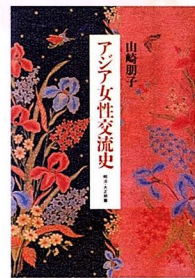
明治・大正期篇

(1995年、筑摩書房)

昭和期篇

(2012年、岩波書店)

晩年のライフワークとも言えるノンフィクション。明治、大正、昭和にわたり、アジア諸民族の女性たちが他国の人たちとどのように交流したか、丹念な取材と具体的事例をもとにして描いた。

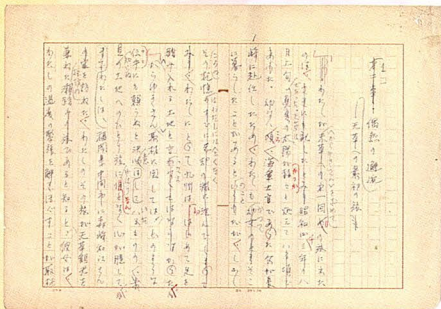


代表作

『サンダカン八番娼館』原稿

(当館蔵)

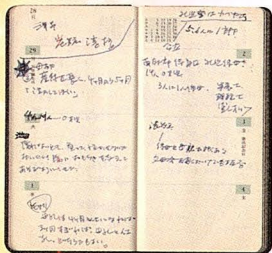
最初に出す予定だった出版社では、内容の大きな改変を要求されたため断ったという。その後、編集者で作家でもある白井吉見との出会いがきっかけとなり、山崎の望む形で筑摩書房から出版された。



からゆきさん取材メモ

(当館蔵)

長女から誕生日に贈られた手帳。おサキさんやほかのからゆきさんへの聞き書きのほか、女性史についての考察など、当時研究をしていた様々な分野について記している。



『サンダカン八番娼館』

(1972年、筑摩書房)

かつてボルネオで娼婦として働いたおサキさんの生涯を描いたノンフィクション。



福井とのつながり

『福井大学学芸学部教育科修了証書』

(当館蔵)

大野高等女学校を卒業した山崎は、2年で小学校教員免許がとれる福井大学学芸学部の教育科に進学。住み込んだ父の実家で様々な仕事を課され、好きだった演劇にかかわる時間をほとんど取れなかったが、友人たちと「幼い青春を謳歌した」大学生活を送ったという。

